



ユネスコスクール オンライン近畿地方大会

日本 ESD 学会第 4 回近畿地方研究会

実践発表・研究発表要旨集

2020 年 11 月 1 日 (日)・8 日 (日)・15 日 (日)



主催：文部科学省 日本ユネスコ国内委員会

奈良教育大学 近畿 ESD コンソーシアム

日本 ESD 学会第 4 回近畿地方研究会実行委員会

実践発表 I ・ ESD 研究発表 I

11 月 1 日 (日) 13 時 00 分～14 時 30 分

◆第 1 分科会

指導助言：朴 恵淑 (三重大学)

司会：大西 浩明 (奈良教育大学)

1) 地域文化を探究する学習

小学校 3 学年総合的な学習の時間 - 「金魚のまち大和郡山」を事例に-

島 俊彦 (大牟田市立吉野小学校)

2) とともに学ぶ 応其小学校 ～大好きな学校・地域に MINT の風を吹かそう!～

辻脇 昌義 (橋本市立応其小学校)

3) 大沢中学校の取組

小畑 幸一 (神戸市立大沢中学校)

◆第 2 分科会

指導助言：大塚 厚 (奈良市教育委員会)

司会：三木 恵介 (奈良市立都跡小学校)

1) 学校と森と水の源流館と近畿 ESD コンソーシアムのプラットフォームでつくる ESD 遠足の実践

新宮 済 (奈良市立平城小学校)

2) 水から(自ら)広げる豊かな学び

佐野 純(箕面こどもの森学園 NPO 法人コクレオの森)

3) 平和学習 奈良に帰ってきた三角定規 -まみいち PEACE プロジェクト-

藏前 拓也 (広陵町立真美ヶ丘第一小学校)

◆ESD 研究会

司会：河野 晋也 (大分大学)

1) 地域資源を活用した学びの実現に向けて ～学校と地域が連携する有効性～

中澤 敦子 (近畿環境パートナーシップオフィス)

2) コロナ禍における奈良ユネスコ協会青年部の取組

松浦 慎 (奈良ユネスコ協会)

3) フィリピン残留日本人を通して SDGs16 を考える

太田 満 (奈良教育大学)

実践発表Ⅱ

11月8日（日）13時00分～14時30分

◆第1分科会

指導助言：伊井 直比呂（大阪府立大学）

司会：西口 美佐子（奈良市立東登美ヶ丘小学校）

1) パラスポーツって何だろう

圓山 裕史（奈良市立飛鳥小学校）

2) 学校統合に関わる課題について ～ユネスコスクールの継続に向けて～

高尾 祐彦（大阪市立御幸森小学校）

3) 高時のオオサンショウウオを守るために – ESDの視点をふまえた学習指導 –

足立 康輔（長浜市立高時小学校）

◆第2分科会

指導助言：中澤 静男（奈良教育大学）

司会：新宮 濟（奈良市立平城小学校）

1) これは使える！ フォトチャット

鎌田 大雅（奈良教育大学附属幼稚園）

2) ESDの視点を取り入れた、思考力・判断力・表現力を高める授業の創造

森 恭一（名張市立蔵持小学校）

3) 大阪市立晴明丘小学校自然観察学習園での活動

富澤 裕美子（エリーニ・ユネスコ協会）

実践発表Ⅲ・ESD 研究発表Ⅱ

11月15日（日）13時00分～14時30分

◆第1分科会

指導助言：及川 幸彦（東京大学）

司会：吉田 寛（奈良教育大学附属中学校）

1) 生物多様性について考えよう

～小学校2年生生活科「どうぶつはかせになろう」の実践より～

中澤 哲也（平群町立平群北小学校）

2) 春日山をシカが喰う ～鹿害から春日山を考える ESD 実践

山本 浩大（奈良教育大学附属中学校）

3) コロナ禍における災害復興支援の可能性 – ユネスコスクールの繋がりを活かして –

狗飼菜々子、谷垣徹、佐藤こころ（奈良教育大学ユネスコクラブ）

◆第2分科会

指導助言：影浦 亮平（京都外国語大学）

司会：島 俊彦（大牟田市立吉野小学校）

1) 探究活動促進のための教員データベース作成

– 立命館守山高校 共創探究科の実践 –

水谷 深志（立命館守山高等学校）

2) 関西創価高校の世界市民教育

大月 昇（関西創価高等学校）

3) ユネスコスクールにおける地域連携教育と SDGS について

中嶋 浩晶（和歌山県立橋本高等学校）

◆ESD研究会

司会：西口 美佐子（奈良市立東登美ヶ丘小学校）

1) ESD for 2030 にもとづいた ESD・SDGs ワークショップとコーチング

– ネットを使った社会人向け実践報告 –

長岡 素彦（一般社団法人地域連携プラットフォーム/ESD-J）

2) 使命感と達成感を大切にした国語科×総合の教材開発

中谷 栄作（橋本市立あやの台小学校）

3) 概念変化に伴う価値観の変容

河野 晋也（大分大学）

実践発表 I ・ ESD 研究発表 I

11月1日（日）

13時～14時30分

地域文化を探究する小学校3年生総合的な学習の時間 —「金魚のまち大和郡山」を事例に—

島 俊彦（大牟田市立吉野小学校）

I はじめに

本実践は、総合的な学習の時間の入門期である第3学年の児童が、奈良県大和郡山市の地域文化である金魚を教材に探究する学習である。身近な地域の文化である金魚や自分たちの生活を問い直すことで、地域に受け継がれる「金魚文化」を継承し守り継ごうとする児童を育成することを目的に、実践を展開した。

II 授業実践

前所属校（大和郡山市立郡山西小学校）で担任した第3学年の児童26名を対象に、昨年10月から12月にかけて「金魚のまち大和郡山」と題した実践を展開した。

【単元の目標】

自分たちの住む身近な地域の文化について探究する活動を通して、金魚が大和郡山市の伝統文化であることを歴史や環境との関わりから理解するとともに、金魚を生かした町づくりや地域活性化に取り組む人々の思いや組織について理解し、地域の一員として「金魚文化」を継承し守り継ごうと考え、より良い地域社会の創造や自らの生活に向けて行動に生かすことができるようにする。

主な学習活動	学習への支援・資料
1. 「金魚のまち大和郡山」について探究の問いをつくる。 2. 大和郡山市と金魚の関わりを知る。 3. 金魚すくい体験をする。 4. 大和郡山の金魚文化を広めるために、自分たちにできることを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・大和郡山市が作成した金魚ののぼり ・一年間に生産された金魚の数と種類 ・金魚研究家の方との交流 ・金魚マイスターの方との交流 ・今までの調べてきた資料や振り返り記述 ・成果物の作成

III 成果と課題

本実践における成果と課題は、それぞれ2点ある。

【成果】

- ・地域文化を継承しようとする児童の姿が見受けられた。（手立ての有効性）
- ・探究的な学習を支える教師の役割を明確化することができた。

【課題】

- ・探究的な学びの広がりや深まり。
- ・SDGsを中核に据えたカリキュラムの創造。

尚、具体的な実践の様子や児童の変容、成果と課題については、大会当日に詳細を報告する。

ともに学ぶ 応其小学校

—大好きな学校・地域にMINTの風を吹かそう！—

辻脇 昌義（橋本市立応其小学校）

1. 学校紹介

応其小学校は、橋本市西部、高野山麓の高野口町に位置し、古くから、高野参詣の入口として栄えてきた、自然が豊かな地域です。地域住民も友好的で、学校にも協力的です。近年の地場産業の織物業の衰退、人口減少、高齢化により、持続可能なまちづくりが必要となっており、本校の児童数も減少し続け、本年度は児童数273名となっています。

本校では、MINT（M みんなで I いい笑顔で N なかよく T 楽しく）を合言葉に、大人も子ども「ともに学ぶ」学校づくりを進めています。

2. 特色のある取組の紹介

（1）ふるさと学習を中心とした学習プログラム

以前からのふるさと学習を中心とした学習プログラムを見直し、本年度は、カリキュラムマネジメントとして、教科横断的な学習カリキュラム作成を行っています。様々な地域の方々を講師として招き、地元の歴史、文化についての学習や自分たちの地域の未来を考えていける児童を育むための学習を行っています。

（2）地域とともにある学校づくり

普段より学校運営協議会を中心に「地域とともにある学校づくり」を進め、様々な意見を反映させながら学校運営をしています。今年度は、「ハート型のひまわり畑づくり」（図1）を行い、地域へのメッセージづくり等を通じて、地域とのコミュニケーションの場として活用することができました。

（3）児童会活動・縦割り活動

本校の学校の活動の基盤となっている活動が、児童会での縦割り活動です。1年生から6年生まで縦割りのグループを20組作り、児童会行事や普段の遊びで活動しています。こうした活動の中で、学校全体での仲間づくりや人を思いやる豊かな心が育ってきています。

3. めざすべき学校の姿、子どもの姿

（1）こんな学校をつくりたい

（2）こんな子どもに育てほしい

4. MINTの風を吹かそう

応其小学校の応援ソングを作りました！



図1 ハート型ひまわり畑

大沢中学校の取組

小畑 幸一（神戸市立大沢中学校）

I 大沢校園の特徴

地域に根ざし持続可能な社会の創り手としての生徒の育成
～つながりを重視した取組～

- (1) 田園地域にある小規模校
- (2) 幼稚園・小学校・中学校・児童館が併設
- (3) 希望就学制度に伴う生徒数の増加

II 地域と共に行う行事（人・自然とのつながり）

- (1) 人とのつながりを重視した行事
異学年間・異校種間・異年齢間（地域）・異国間（国際）交流活動
もちろん同学年との交流活動
- (2) 自然とのつながりを重視した行事
学校・地域の環境を活用した活動（里山保全活動など）

III 新学習指導要領実施に向けて

- (1) 「大沢中で育みたい資質・能力（仮）」の検討
- (2) 「教科横断的な視点に立った資質・能力の育成」について

IV 今年度の取組から

- (1) 「SDGsを知る」（中2）
調べたことをわかりやすく発表する①
- (2) 「トライやる 人とのつながりで防災学習 大沢守ろう！」（中2）
講義・フィールドワーク・まとめ
調べたことをわかりやすく発表する②
- (3) 「トライやる」を終えて、生徒の成長とその後の取組
「大沢守ろう！」 ⇨ 「地域の方々と交流をもとう！」

～ 地域からの愛情につつまれて・・・ ～

学校と森と水の源流館と近畿ESDコンソーシアムが 「学びのプラットフォーム」でつくるESD遠足の実践

新宮 済（奈良市立平城小学校）

I 目的

近畿ESDコンソーシアムでは、2017年度から森と水の源流館（公益財団法人吉野川紀の川源流館物語）と協働して「授業づくりセミナー」を開催してきた。この4年間のESD実践の取り組みからみえてきた、ESDの効果的な現地学習とゲストティーチャーの活用方法について明らかにしていく。

II 方法

授業づくりセミナーにおいて、本校第4学年の総合的な学習「秋篠川の恵みを未来へつなげよう」の授業開発をし、継続して授業改善を行なった。改善してきたことは3つある。1つ目は、行動化を促す学習展開である。昨年度実践した学習の主な流れと児童の秋篠川観の変化を表1に示す。2つ目は、人の営みに憧れるゲストティーチャー（以下GTとする）の活用方法である。3つ目は、地域の川に興味を持つための効果的な現地学習の開発（表2）である。

表1 2019年度実施した学習の主な流れ

学習活動	児童の秋篠川観とゲストティーチャー（GT）の活用
既存の知識の確認	「川についてわからない」と過半数が回答
地域の川の生物調査	・秋篠川は、やや汚い川・たくさん生き物がいる GT
森と水の源流館遠足	・吉野川には多面的な役割がある。 GT ・館長のように地元の川の役割を見つけて伝えたい。 GT
地域の川の役割探し	・秋篠川も同じくように多面的な役割があった。 GT ・秋篠川と地域の人がつながっている。 GT
地域の川を時間軸、空間軸で比べる	・秋篠川は昔サワガニがとれるくらいきれいな川。 GT ・今の秋篠川はゴミが多いのでなんとかしたい。
自主的にゴミ拾いや川の観察した児童の報告	・プラスチックゴミが多い。 ・川の役割に影響があるかもしれない。
漁師や環境省への聞き取り	・秋篠川のカニを大阪湾のタコがエサにしていた。 GT ・大阪湾の漁師さんは毎日船一杯になるまで川から海に流れるプラスチックゴミを拾い集めている。 GT
できることの行動化	・館長のようにプラスチックゴミを海に流さないために、一人ひとりができることをしていくことが大切。 GT
行動の問い直し	・地域の大人を変えないと河川のゴミ問題は解決しない
大人への訴え	・グレタさんのように、川のプラスチックゴミの原因が大人にあることを訴えることで解決につながる。 GT

表2 2019年度現地学習の流れ

時間	学習内容
事前学習	きれいな川に興味を持つ
遠足（午前） 吉野川の調査	川の恵みを体感する ・生き物観察 ・川遊び、川辺で食事 ・自然水を飲む ・滝に癒される
午前のまとめ	体験した恵みを吉野川の役割として価値づける
遠足（午後） 源流館の見学	館内のインタビューや展示から吉野川の役割を見つめる
事後学習①	見つけた吉野川の役割を源流館に評価してもらう 秋篠川にも役割があるのか疑問を持つ
事後学習②	館長が見つけた川の役割を地域の人に伝えるという川を守る営みにふれる

III 結果

森と水の源流館にはゲストティーチャーとして知識を説明してもらった役割だけではなく、共に調査し児童の追究を評価する役割、川を守る営みを紹介する役割、児童の行動化をアドバイスする役割として関わってもらった。結果として児童は源流館の営みに憧れ、自分も同じようになりたいと行動を起こす意欲につながった。あえて地域の河川から離れて、「水源地の村づくり」を進めている地域の「川の恵み」を実感することは、地元の川の役割探しにつながる追究のエネルギーとなった。

水から(自ら)広げる豊かな学び

佐野 純 (箕面こどもの森学園(NPO法人コクレオの森))

I はじめに

本校のカリキュラムには、小学部にテーマ、中学部にワールドオリエンテーション(以下、WOと表記)というテーマ学習がある。「環境」「市民性」「人権」「自然」のカテゴリから抽象的なテーマを設定し、探究学習を行っている。最初に概要を伝え、施設を見学したり、講師の方から話を聞いたりして学んだ後に個別またはグループで具体的なテーマを決めて調べ学習をして、最後に発表をするという流れになっている。

2019年度1学期については、子どもたちが「もっと自分の関心のあることを、自分の力で進めていきたい」と感じているようだったので、初めのきっかけだけを大人が用意して、そこから先はそれぞれの考えで進めていくことを支援しようと考え、「水」というテーマに決めた。

「水」であれば、生きる上で欠かせないもので誰もが身近に感じるものだから、そこからの子どもたち自身が問いを広げていくこともやりやすいだろうということでテーマとして採用し、1学期間をかけて学ぶことにした。

II 学習の流れ

- (1) 水の飲み比べ
- (2) 問い出し・シェア
- (3) 各自の問いを具体的に検討
- (4) 自分のテーマに沿った見学先・実験などを検討
- (5) 見学先を訪問・実験・インタビュー
- (6) 調べた内容をまとめる
- (7) 発表する
- (8) 振り返る



図1 水の飲み比べ

III チャレンジポイントと学びの成果

<チャレンジポイント>

- 子どもたちが自分で作っていく学びを尊重すること
- 別々のテーマで探究していくこと
- 発表形式の工夫

<学びの成果>

- 自分の問いやテーマを持ち、自力で学びをつくっていく力・姿勢を育む
- 学校以外の場でも自分の責任で学びを進める経験
- 教員が協働して学習をつくっていったことで、カリキュラムが改善



図2 「水」についての問い出し

平和学習 奈良に帰ってきた三角定規 — まみいちPEACEプロジェクト —

藏前 拓也（広陵町立真美ヶ丘第一小学校）

I はじめに

本実践の学習では、奈良から沖縄の戦地に行かれた方の遺品である三角定規が、74年ぶりに遺族のもとへ届いたことが掲載された新聞記事を取り上げた。この記事は、学級の児童が夏休みの宿題でノートに貼り付けていたものであった。記事には、「戦後74年と言うけれど、私には今も終戦はない。戦争で尊い命が奪われ、残った家族は悲しい運命に翻弄されるのだから」と遺族のコメントが記されていた。

この記事を書いた新聞記者と遺族との出会いをきっかけに、奈良にまつわる戦争について知ることで、戦争を身近で切実なものにとらえさせようとした。加えて、戦争の被害は、空襲や原爆による被害だけでなく「戦争によって亡くなられた方の遺族の思いや願い」にもあることに気付かせたいと考えた。

II 実践の概要

■第6学年 総合的な学習の時間(全15時間)

(1)戦争についての主な事象を学習する。(知る)

「広島と長崎では何が起こったのだろう。」

(2)奈良にまつわる戦争について調べる。(調べる)

「奈良にまつわる戦争の被害にはどんなものがあるのだろうか。」

(3)ゲストティーチャーからお話を聞く。

・毎日新聞記者：塩路佳子氏

・ご遺族：山口紀子氏

(4)調べたことをまとめ、プロジェクトを発足する。(まとめる)

「自分たちにできることって何だろう。」

(5)平和学習発表会を開催する。(ひろげる)

III 考察

奈良にまつわる戦争の内容を取り上げたことで、自分たちが住んでいる地域からも戦地へ行った人がいたことを知り、戦争を身近なものとしてとらえるができた。また、ゲストティーチャーから直接お話を聞くことで、遺族の方の思いや願いを知り、戦争の被害は空襲や原爆などだけではないことを考える機会になった。

自分なりに考えた平和を実現するために、大切にしなければならないことや必要なことを考え、実行しようとする態度を養うことができた。この平和学習を通して、SDGs16への貢献につなげることができたのではないかと考える。



図1 毎日新聞の記事

地域資源を活用した学びの実現に向けて

—学校と地域が連携する有効性—

中澤 敦子（近畿環境パートナーシップオフィス）

I はじめに

近畿環境パートナーシップオフィスでは、2013年度より「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業に係るESD環境教育プログラムの作成・展開事業」「近畿地方ESD活動支援センター事業」等において、学校教育でのESD環境教育の推進を目的に、地域人材や自治体環境部などのステークホルダーによる「ESD学びのプラットフォーム」の創出や、自治体・専門家・地域拠点を通じた教材の提供、授業づくり支援などに取り組んでいる。

II 研究の目的と方法

ESDでは、地域資源の教材開発や体験的な学習を組み込んだ探究型の学習が展開されることが多い。また、新学習指導要領でも「社会に開かれた教育課程」がキーワードの一つとなっており、学校と地域との連携が当然視されている。本研究では、本オフィスが2013年度より関わった37本のESD環境教育の実践報告や学習指導案を分析することで、学校と地域が連携する有効性を明らかにするものである。

III 実践報告等の分析

37本のうち、36本が地域の教材化に取り組み、体験的な学習を展開していた。また、そのうちの33本の実践において多様なステークホルダーと連携して学習を展開していた。（表1）

また、目的によって連携相手を選んでいる様子を伺い知ることができた。

例えば、学芸員との連携では、教員の事前研修時に専門的な知識を得ることを主たる目的とした事例が5本であり、生物調査時と同行し、体験と知識を結びつけることを主目的とした事例が6本であった。また、地域の方との連携では、体験活動時一緒に活動した事例が8件、インタビューや学習成果の発信時での連携が4件であった。

表1 学校と地域の連携

学芸員	14
地域の方	13
NPO・市民団体・ボランティア	13
大学教員	13
地域の専門家（個人）	8
環境課	6
教育委員会	7
その他行政	10
民間研究所	3
民間その他	2
高校	1
合計	90

IV まとめ

本研究によって、特に地域の方々との連携が、「取組を行っている大人との出会いとあこがれ」「自分も地域の役に立つことができるという自信」「地域の方々に喜んでもらえるという自己有用感」「地域の方と一緒に課題を解決していこうとする意識の高まり」など、持続可能な社会づくりへの行動化に効果的であることが明らかとなった。

EI-2)

コロナ禍における奈良ユネスコ協会青年部の取組

松浦 慎（奈良ユネスコ協会青年部）

I はじめに

厚生労働省を中心に、自身や、周囲、そして地域を感染拡大から守るため、自身の生活に合った「新しい生活様式」の実践が叫ばれている。対面型のボランティア活動においても例外ではなく、3密（密集、密接、密閉）のリスクがある活動は中止を余儀なくされている。

しかし、時間は確実に流れている。このような時だからこそ、歩みを止めない持続可能なアクションが必要である。本発表は、奈良ユネスコ協会青年部のメンバーが、自分たちにできることを模索し、実行したことをまとめたものである。

II コロナ禍の活動の再構築

(1) 子どもたちへのアプローチ

- ① 郵送とSNS
- ② 「カラフル」活動のすすめ
- ③ アンケート

(2) オンライン研修

- ① ギター倶楽部
- ② 「旅心」リレー講演会
- ③ 未来創造会議
- ④ 「歌心」ソングカフェ
- ⑤ 「本心」ブックトーク
- ⑥ 交流会&座談会
- ⑦ アナザースカイ
- ⑧ 奈良プランニング

III アクションから見えてきたこと

(1) 持続可能な活動にするポイント

- ・過度な負担をかけない
 - 企画はみんなで分担する。
 - 多様な開催日を設定する。
- ・魅力的な活動にする
 - メンバーのニーズを把握する
 - やってよかった。・社会的承認
- ・「財」を活用する
 - メンバーの「得意」を伸ばす。

(2) 発想の転換

ESDをやらなければならない
SDGsのためにやる、ではなく
やりたいことをやっていたら、
ESDになっていた。SDGsにつながった。

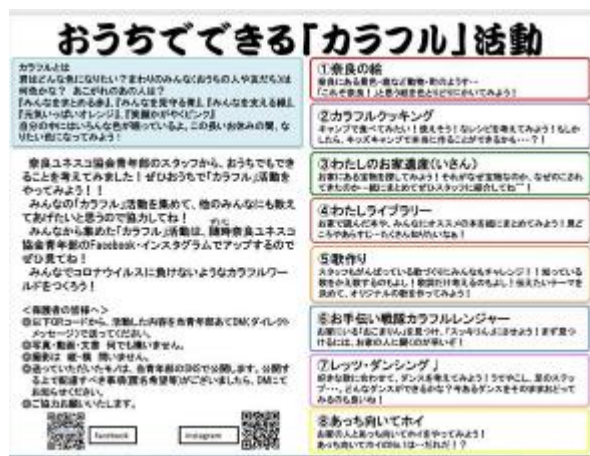


図1 参加者に発信した「カラフル活動」

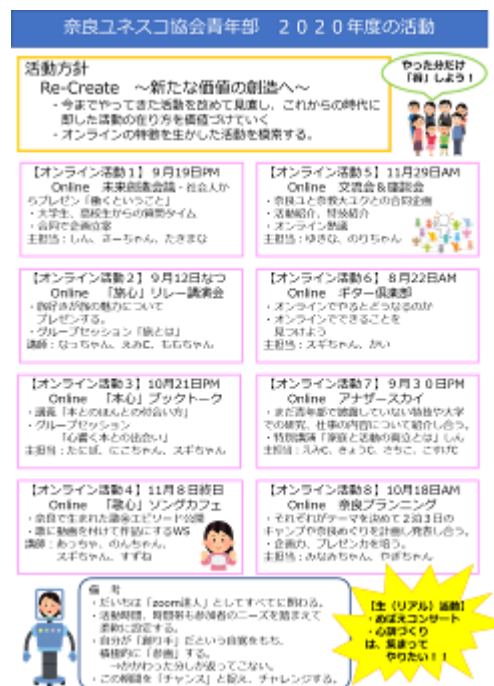


図2 青年部「新」年間計画

フィリピン残留日本人を通して SDGs16を考える

太田 満（奈良教育大学）

I フィリピン残留日本人

フィリピン残留日本人とは、太平洋戦争終結までにフィリピンに渡るか、フィリピンで生まれた日本人で、戦争によって父親または両親と離散するなどして、現地に残留せざるを得なかった日本人のことである。フィリピン残留日本人は、戦後の「反日感情」の激しいフィリピン社会で、難を逃れて山奥に隠れ、日本名をフィリピン名に変え、日本人であることを隠して生きてきた。極度の貧困にあり、フィリピン国籍を取得することもできず、不安定な社会的立場に置かれたのである。外務省第12次調査（2019年3月公表）によると、フィリピン残留日本人は、計3,810人いるとされる。その内、生存者（生死不明者含む）は1,723人（45%）、死亡者は2,087人（55%）である。生存者（生死不明者含む）のうち、日本国籍取得済は654人（38%）、無国籍者は1,069人（62%）である。

II フィリピン残留日本人の無国籍問題

無国籍者とは、「いずれの国家によってもその法の運用において、国民とみなされない者」（無国籍者の地位に関する条約第1条）である。フィリピンでは、2011年に無国籍者の地位に関する条約に批准するなど、無国籍者を減らそうとする取り組みがなされている。フィリピン残留日本人の願いは「日本人であることを認めてほしい」ことだが、フィリピン残留日本人が無国籍状態におかれていることの解決策をフィリピン政府にだけ委ねてよいかという問題がある。「すべての者は、国籍を取得する権利を有する」（第15条）という世界人権宣言を持ち出すまでもなく、今日では、持続可能な開発目標（SDGs）において、2030年までに「16.9 2030年までに、すべての人々に出生登録を含む法的な身分証明を提供する」ことが言われている。このような国際的取り組みの中で、日本に住む我々が、フィリピン残留日本人の無国籍問題をどう受け止めるかが問われている。

III フィリピン残留日本人のライフヒストリー

本発表では、アカボシハツエさん（1926年生まれ）のライフヒストリーを紹介する予定である。ハツエさんのお父さんは熊本県出身の日本人で、お母さんはフィリピンに住むバゴボ族の人である。なお、ハツエさんは、ドキュメンタリー映画「日本人のわすれもの」（小原浩靖監督）に登場している。同ドキュメンタリーは、学校の授業等でも活用できるよう、50分版（大学）、40分版（中高）が作成されている（<http://wasure-mono.com/wasuremono/students/>参照）

【参考文献】

河合弘之編（2005）『フィリピン日系人の法的・社会的地位向上に向けた政策のあり方に関する研究』東京財団研究推進部

実践発表Ⅱ

11月8日(日)

13時～14時30分

パラスポーツって何だろう？

圓山 裕史（奈良市立飛鳥小学校）

1. 目標

パラリンピック選手やそれを支える人たち、パラリンピックの運営に関わった人の考え方にふれ、よりよく生きようとする人間の強さや気高さを理解し、人間として生きる喜びを感じる。また、障がい者理解を深め、誰に対しても差別することや偏見を持つことなく、公正・公平な道徳的判断力や心情を育てる。

2. 単元について

東京オリンピック・パラリンピックの開催にともなって、パラリンピック競技をCMやTV番組で目にする機会が多くなっている。この機会にパラスポーツを通して障がい者理解につなげるいい機会である。

また、パラスポーツには「障がい者のためのスポーツ」という認識が強いが、見方を変えれば「誰もが公平に行えるスポーツ」だというユニバーサルデザインの側面もあり、一面的な見方から多面的・多角的な見方へ発展させることに適していると考えられる。実践を展開していくときには、パラリンピックのピクトグラムや競技の紹介動画、手作りボッチャ体験から、パラスポーツについて感じたり、考えたりできるようにする。

そして、パラリンピックの父と呼ばれる中村裕医師のダイバーシティ社会、共生社会といった考えにふれることで、児童にもこうした考えが芽生えるであろう。

3. ESDとの関連

- 【SDGsについて】 10. 人や国の平等をなくそう
3. すべての人に健康と福祉を
- 【ESDの視点】 多様性 責任性
- 【資質・能力】 クリティカルシンキング
コミュニケーション力
- 【価値観】 世代内公正 人権尊重

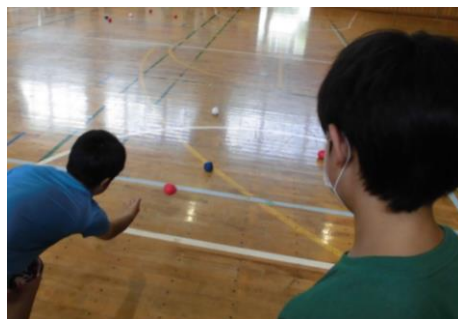


図1 手作りボッチャ体験

4. 成果と課題

学習のまとめとして、最後に振り返りを書かせると、学習前には「障がい者のためのスポーツ」といった見方が大多数を占めていたのだが、学習後には、「誰とでも平等にスポーツを楽しむ」といった多面的、多角的な見方へと発展し、ダイバーシティ社会、共生社会といった考え方の基礎が育まれたと考えられる。

学校統合に関わる課題について —ユネスコスクールの継続に向けて—

高尾 祐彦（大阪市立御幸森小学校）

I 発表要旨

2012年10月にユネスコスクールに認定された本校は、「児童の自尊感情と郷土愛を養い、心豊かにしなやかに生きる力をはぐくむ」ことをねらいとして「多文化共生」「国際理解」「平和」「人権」「地域の文化財」などをテーマとした学習に取り組んでいます。

そのような中、本校は、近年の児童数の減少により、令和3年4月に隣接する小学校との統合が予定されており、統合に向けた課題に加え、ユネスコスクールの継続に向けた課題に直面しています。

本校のユネスコスクールとしての取組を踏まえ、今後のユネスコスクール継続、取組のさらなる充実・発展について、広く皆さまのご意見、ご示唆をいただければ幸いと考えております。



II 発表の内容

- (1) 多文化共生・国際理解に関わる取組
- (2) 地域理解に関わる取組
- (3) 協調性・コミュニケーション力を高める取組
- (4) 学校統合に向けた課題について
- (5) ユネスコスクールの継続に向けた課題について



高時のオオサンショウウオを守るために

—ESDの視点をふまえた学習指導—

足立 康輔（長浜市立高時小学校）

1 学校紹介

高時小学校は、長浜市木之本町の北東に位置している。全校児童 47 名の小規模校で、第二学年と第三学年は複式学級である。本校の学区内には、貴重な地域資源が数多くある。滋賀県最初の文化財収蔵庫である己高閣、世代閣には、鶏足寺の十一面観音をはじめ、数々の重要文化財が納められている。薬師如来像や石道寺の国の重要文化財である十一面観音像・石田光成ゆかりの地など、歴史的な遺産が多く存在する。また、自然環境にも大変恵まれている。日本のお茶栽培の発祥の地である学校周辺には豊かな茶畑があり、全校で茶摘みをしたり、児童が茶道を学び、お茶を点てたりしている。さらに、地域に流れる大谷川には、国の特別天然記念物のオオサンショウウオが生息しており、地域全体で保護に努めておられる。

2 本校の総合的な学習の時間について

上記のような貴重な地域資源について、本校では生活科・総合的な学習の時間を中心に児童たちが発達段階に応じて、探究的に学びを深めている。例えば第三学年は己高閣や十一面観音像などの主に文化財、第四学年は大谷川の水質環境やオオサンショウウオ、そして第五学年では茶道学習や学校のビオトープについて、最後に第六学年では茶道学習や高時の古墳について等をテーマに、児童が主体的にわかったことを紅葉祭会場で、広く地域や観光客の方々に発信している。

3 第4学年総合的な学習の時間の授業実践（令和元年度）

昨年度4年生では、大谷川に生息するオオサンショウウオを守るための学習を進めてきた。まず、大谷川の水質調査である。学校付近に流れる大谷川の中流や上流の水生生物を採取し、水質や川の状況を調べた。そして、大谷川のオオサンショウウオに精通している、古橋のオオサンショウウオを守る会の方、長浜バイオ大学の方、さらに長浜市役所歴史遺産課の方に出前授業をしていただいた。学習の終盤には、専門的な方から学んだことや、自分たちが調べて分かったことを通して、自分たちがオオサンショウウオを守るためにできることは何か話し合いを進めた。そして、話し合い、まとめたことを紅葉祭会場で発表し、オオサンショウウオについて知ってもらうだけでなく、手作りのチラシを作成し、多くの方々に配布した。

このようなオオサンショウウオを守るために学習を深めることに取り組んできた授業実践について発表する。



図1 高時小学校4年生が作成したチラシ(R1)

これは使える！ フォトチャット

鎌田 大雅（奈良教育大学附属幼稚園）

○はじめに

これから到来するsociety5.0時代には、自らが課題意識を持ち、仲間と考え、探究し、創造していく力が求められます。保育の現場では、子どもたちに均一な活動の経験をさせるのではなく、子どもの「面白い！」「不思議！」という“トキメキ”と、「やってみよう！」「こうしたらどうなるかな？」という“ヒラメキ”を、いかに保育者が読み取り、一人一人の興味関心を深められる経験を保障できるかが重要視されています。本園では、子どもの“トキメキ”と“ヒラメキ”を読み取ることが重要であると捉え研究を重ねています。仕事量が増える教育・保育現場の中、効率的に行える研修方法としてタイトルにある【フォトチャット】を考案し、短時間での研修を行っています。

○フォトチャットとは

各園の研究テーマなどに沿って選んだ写真1枚とその時のエピソードをもとに、視点を絞って保育者間で語り合い、子どもの学びや経験、保育者の思いなどを探る研修方法です。

○フォトチャットの方法

- ①. 保育者が研究テーマ等に沿った写真を保育中に写真を撮る。
- ②. 撮影した写真からフォトチャットに使う写真を1枚選ぶ。
- ③. モニター上に写真と研究テーマ等に沿った視点の枠を映す。
- ④. モニター上の写真を見ながら、写真を撮った保育者が前後のエピソードを語る。（3分程度）
- ⑤. エピソードを受けて聞いていた保育者が研究テーマ等に沿って、視点を絞って語り合う。（7分程度）
- ⑥. 記録者は語り合いを聞きながら、研究テーマ等に沿った視点の枠に記録していく。
- ⑦. フォトチャットの記録を集積し、自園の研究に反映させる。

○フォトチャット中のモニター共有画面（本園の場合）

本園では、子どもの“トキメキ”や“ヒラメキ”について語りを深めるために以下の枠組みを使用しています。

○フォトチャットの効果

- ・子どもの姿を読み取る力が養われる
- ・遊びの様子や子どもの姿、クラスの実態等を職員間で共有することができる
- ・同僚性が高まる
- ・保育観や子ども観の形成につながる

図1 フォトチャット時のモニター画面

ESDの視点を取り入れた思考力・判断力・表現力を高める授業の創造

森 恭一（名張市立蔵持小学校）

I はじめに

本校は平成24年にユネスコスクールに認定され、ESD（持続可能な開発のための教育）の視点を取り入れた学習活動を展開してきた。各教科や総合的な学習の時間での教科等横断的なカリキュラムをESDカレンダーとして編成し実践を重ねている。また、2015年に国連で提唱されたSDGs（持続可能な開発目標）の17とゴールの関連性も視野に入れながら教材を開発するようにしている。ESDを通して、言語能力を向上させ、思考力・判断力・表現力を高め、行動化につなげることができると考えている。

II 実践例

(1) 4年生 「資源を大切に」

【活動（学習）内容】

- 自分たちの生活の中で何気なく出しているゴミの現状と環境や生き物への影響を考える。
- 自分たちが出しているゴミの中にも、まだ使うことのできる資源がないか考え、話し合う。
- 資源を集め、自分たちでリサイクル、リユースする方法を考え、実際に行い、全校に発信する。

【他教科との関連】（教科横断的な視点）

「ゴミのしまつと活用」（社会） 「ランドセルは海をこえて」（国語）ほか

【ESDの視点 SDGsのゴールとの関連】・相互性・有限性・責任性，SDGsのゴール12「つくる責任・つかう責任」など

【子どもたちの様子】

- ・世界的にゴミの排出が問題となり、自分たちが出したゴミを処理しきれず海にプラスチックゴミがあふれ、動物が命を落としている事例を動画や新聞でみたことで「このままでは、いけない」と問題意識をもつことができた。
- ・他教科とも関連させることで、1学期は「資源を活用していく」ことを意識して生活することができていた（日記や普段の生活等）
- ・自分たちが呼びかけて集めた資源を活用して、自分たちが考えた遊び道具をつくることで、意欲的に活動することができていた。
- ・1年生へ発表の場を設けたことで、自分たちが作った道具で楽しそうに遊ぶ1年生を見て、満足感を得ることができていた。また、事後にいただいた手紙もうれしそうに読んでいた。

III まとめ

各学年でSDGsの17のゴールとの関連性を考え、ESDの視点を取り入れた学習をすることによって、児童は自分たちの身の回りのさまざまな問題に気づき、できることを考え、話し合っ発信するなど、行動化へとつなげることができるようになってきている。

大阪市立晴明丘小学校自然観察学習園での活動

富澤 裕美子（エリーニ・ユネスコ協会）

I 地域・学校・PTAによるユネスコ・スクール晴明丘小学校の実践

晴明丘小学校創立100周年（平成12年度）記念事業として「自然にふれて命の尊さを理解できる子どもたちに」との願いを込め、地域、学校、PTAが一丸となり自然観察学習園を校庭内に1から全くの手作りで完成しました。この自観察学習園を作るのにあたって、維持管理のお手伝いと植栽を学校とPTA・地域の人で構成する自然観察学習園運営委員会・地域園芸クラブが組織され現在に至っています。20年たった今、自然観察学習園は、田んぼ、季節の花と「なにわ伝統野菜」をはじめとする野菜づくりのエリア、池と川のビオトープのある自然豊かな場所となりました。今春開墾された「くすのき畑」を含め、小学校課程の教科書にある植生物が校庭で見ることができるよう植栽を進めています。米作り・「なにわ伝統野菜」・さつまいもなど栽培し収穫して食べることで、あおむしから蝶・バッタやカマキリなど「自然とふれあい、命の尊さを学ぶ」生きた学びを得ることのできる環境教育の場となっています。なにわ伝統野菜の復活に取り組んでこられた市民活動団体や生産者農家、お茶・植物・生物・草木染・食育等各分野の研究者・専門家の方々からアドバイスをいただきながら、セミナー・イベントなどを通して、子どもたちが豊かな学びを得ることができるだけでなくPTA・地域の人の生きがいを見出しています。

2年生さつまいも



自然観察学習園での感想

- ・天王寺蕪や勝間南瓜などこの年になってはじめて知り、味わいました（80歳）
- ・なにわ伝統野菜や秋の七草をこの小学校にきて初めてみました（50歳・教員）
- ・[お茶の授業を終えて] 1年生の時、5年後に飲めるといいねということで植えてから、ずっと楽しみにしていました。お茶を飲めたのは校長先生や地域園芸クラブのみなさんがお茶の木を守ってくださったからだと思います。お茶はとてもおいしかったです。（6年）



私のまちのたからもMAP

(エリーニ・ユネスコ協会 ユース発行)

II 地域学習

晴明丘地域は大阪・上町台地の熊野街道沿いに位置し、「わたしのまちのたからもMAP」づくりによって地域の歴史や文化の学びを通してローカル・アイデンティティを育んできました。自然観察学習園における地域の特産物や伝統野菜、片葉の葎などの植栽から自然に触れあえる学び合いが世代を超えて行われ、さらなる発展を目指したいところです。



実践発表Ⅲ・ESD 研究発表Ⅱ

11月15日(日)

13時～14時30分

生物多様性について考えよう

—小学校2年生生活科「どうぶつはかせになろう」の実践より—

中澤 哲也（平群町立平群北小学校）

I 目的と背景

平成29年3月に小学校学習指導要領が公示され、その前文に「持続可能な社会の創り手を育む」ことが明記された。一方で、同年改訂された小学校学習指導要領解説生活編では、上記の視点を取り入れた改訂は見られない。本研究では、持続可能な社会における生物多様性を理解し、大切にしようとする態度を育むために小学校生活科で活用できる教材の開発を行い、授業実践を通してそれらの有効性を検討した。

II 方法

本校の小学校2年生26名を対象に2019年秋に実施した。児童が生き物間のつながりについての知識を深めるために、天王寺動物園と協力して開発した授業実践を行い、実践後の子どもの変容をもとに生き物への親しみだけでなく、知識理解を促す授業のあり方について考察する。

主な学習活動	学習への支援
1. クイズ「だれのフンでしょう？」 ○動物によってフンの形や大きさ、付着物が違うことに気付く。 ○動物の食べているものや、生活の様子など、生き物の生態について関心を持つ。	・「ウンチ標本」を使って、クイズを出し、よく観察させることで、動物の種類によって様々な違いがあることに気付かせる。
2. 生き物の生態について調べてみよう。 ○図書館の図鑑を利用して、次の5点について調べる。 ①体長②体重③主な生息地④主な食べ物⑤調べて気付いたこと	・天王寺動物園で飼育されている生き物から、選ばせるようにする。また、図書館や、天王寺動物園の獣医とも連携を取り、調べ活動のサポートを行うようにする。
3. 天王寺動物園で生き物の観察をしよう。（課外） ○園内を回りながら、生き物だけでなく、周りの環境にも視点を向け観察する。	・事前に園内の地図を配布し、自分たちで道順を考えさせる。
4. 生き物はどんなものを食べているのだろうか。 ○調べた動物を発表することを通して生き物同士のつながりに気付く。 ○肉食動物・草食動物・植物の相互性について考える。	・調べて出てきた動物を張り出したり、矢印でつないだりしながら、生物のつながりを可視化していくようにする。 ・様々な種のバランスを崩すとどうなるかを考えさせることで、生態系バランスの大切さを考えさせる。
5. 学校の観察池にいるタニシを飼育しよう。 ○タニシのエサや、身の回りの環境について調べる。 ○タニシが住みやすい環境を考え飼育する。 ○図鑑をもとに、タニシの生態について観察し、カードを記入する。	・観察池に行き、池の水の様子や周りの環境の様子にも視点が向くように支援する。 ・子どもの関心が高まるように、図鑑を用意する。

図1 単元展開の概要

III 結果と考察

実践を通して、多くの子どもは「食う-食われる」といった生き物どうしの関わりだけでなく、生き物から出た糞が、植物の栄養になり、循環しているということに気づいた。また、生き物の糞が植物の栄養の一部になることがわかると、糞に対する抵抗が減少しつつあると感じた。

児童一人一人がタニシを飼育したことによって、タニシの住む池の環境や水に注目しながら飼育環境を自分たちで考え作り出すことができた。

春日山をシカが喰う —鹿害から春日山を考えるESD実践—

山本 浩大（奈良教育大学附属中学校）

I はじめに

春日山原始林は日本でも有数の照葉樹林が成立しているが、近年“奈良のシカ”によって森林生態系に負の影響が生じている（前迫2013）。日本各地でも、シカによる植生の変化が報告されており（辻野他2013, Tsujino et al.2013）、それに伴って土壌の改変や他の動物相への影響、外来種の侵入なども報告されている（前迫2013）。春日山も同様に、シカにより後継樹への影響が報告されている（前迫2013）。このようなことが春日山で起こっているが、生徒たちは漠然としか、春日山の問題を知らない。そこで、事前学習を通して春日山について知り、自然を保護する立場にある人の説明や春日山の状況を見て、食害の状況やそれに関わる問題について学習する機会を総合的な学習の時間に設けた。

II 授業実践（計7時間、7は本校の校外学習の時間で行った）

主な学習活動
0、大台ヶ原を歩く（希望者のみ） ・大台ヶ原を散策し、森林の現状・問題について学び、自然環境の保全に対する興味や関心を高める。
1、春日山原始林についてのマップを作成する ・SDGsの視点で、春日山原始林で起こる問題を見つめ、負の連鎖構造を知る。
2、調べ学習を通して、春日山原始林の問題を知り、再度マップを作成する ・マップを作成し、様々な問題が絡み合っていることを知る。
3、他学年の生徒に、奈良めぐりの際レクチャーをするための資料作成
4、食物連鎖ゲーム（実習）
5、食物連鎖ゲーム（まとめ）
6、前鬼モニタリング調査の報告会 ・事前に2泊3日のモニタリング調査に参加し、自然の測定方法を学ぶ。 ・学んだことの整理とアウトプット。
7、春日山を歩く（奈良めぐり）
8、まとめ ・諸問題を解決していくために今の自分ができることやこれからの春日山の活用を考える。

上の表のように授業実践を行った。本校では、1、2年合同で校外学習を行っており、2年生が春日山の現地で1年生に向けて説明を行う場を持っている。詳細については、当日の発表で行う。

III 引用文献

- ・前迫ゆり（2013）世界遺産春日山原始林．ナカニシヤ出版
- ・ Tsujino Riyou et al.(2013) Degradation of Abies veitchii wave-regeneration on Mt.Misen in Ohmine Mountains : effects of sika deer population. Journal of plant research.126(5). p.625-634
- ・辻野亮他（2013）大峯山系弥山におけるシラビソ縞枯林とニホンジカの影響の変化．奈良植物研究会．34. p.13-20

コロナ禍における災害復興支援の可能性 —ユネスコスクールの繋がりを活かして—

狗飼 菜々子・谷垣 徹・佐藤 ころろ（奈良教育大学ユネスコクラブ）

I はじめに—ユネスコクラブと災害復興支援

本団体は2011年7月に活動を開始した学生団体で、ESDを実践できる教員になることを目的に、ESD-SDGsに関する勉強会、他大学学生や地域活動団体等との多様な連携事業、ユネスコスクールを中心とした学習支援や子ども向けイベントの企画運営等に取り組んできた。また、東日本大震災をきっかけに、災害復興支援にも取り組んできた。東日本大震災で被災された岩手県陸前高田市へは毎年、陸前高田市文化遺産調査団として学生を派遣し、文化財保護調査および防災教育調査、教材開発を行ってきた。2018年に発生した西日本豪雨災害においては、その発災直後に災害復興支援ボランティアチームを立ち上げ、岡山県倉敷市および岡山市でのボランティア活動に13回、計64名の学生が参加した。

II コロナ禍における災害復興支援の始まり

2020年7月に九州地方で豪雨が発生し、九州各地で甚大な被害をもたらした。今回は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、遠方からのボランティアの受け入れがなされず、人手不足に陥っていた。本団体も現地へボランティア活動に駆けつけることが出来ず、遠方からでも出来る支援がないかと、企画チームを立ち上げた。ユネスコスクールのネットワークから、学校が被災した大牟田市立みなと小学校と繋がることができ、ニーズ調査をし、まずはユネスコクラブ学生有志によるメッセージ動画の作成から取りかかった。



みなと小学校へのメッセージ動画

III オンラインでの学習支援

みなと小学校の先生からのご提案で、オンラインでの学習支援を行うこととなった。新しく立ち上げられた「みなとESDすすめ隊！」の児童らと、Zoomを用いたオンライン交流を開始し、初回はユネスコクラブから奈良という地域について、クイズを交えながら紹介した。児童らが自分たちの身近な地域を題材に活動に取り組む際の、地域を見る視点の手助けとなるよう、紹介の仕方を工夫した。今後も継続したオンラインでの学習交流を予定している。

IV まとめ

奈良教育大学ユネスコクラブは創設当初より継続的に災害復興支援に取り組んできた。令和2年7月豪雨で被災された大牟田市立みなと小学校へ、オンラインでの学習支援を開始した。現地で直接的に支援するだけでなく、遠方からでも出来る災害復興支援のあり方を見つけることが出来た。ユネスコスクール・ESDの繋がりを大切にして、今後も継続的に関わっていきたい。

探究活動促進のための教員データベース作成

- 立命館守山高校 共創探究科の実践 -

水谷 深志・中條 岳青（立命館守山高等学校）

1. 立命館守山における探究学習

本校は中高一貫校として6年間を見通した探究学習のストリームを構築している。特に高校では1年次に様々なトピックを基に思考力の向上を目指す

「Thinking Design」、2年次では文理に分かれて個別の探究テーマを設定して活動する「文社探究Ⅰ・理数探究Ⅰ」、3年次では2年次での取り組みを発展させた科目として、「文社探究Ⅱ・理数探究Ⅱ・グローバルAP*1・サイエンスAP」を設定している。高校卒業時には12,000字のレポートや研究発表用のポスターなどを集大成として作成することとなっている。本年度は3年間の探究ストリームの完成年度であり、高校3年生の生徒たちがこれまでの成果をまとめるべく鋭意活動を進めている。

*1: Advanced Placementの略。本校で独自に設定している高大連携授業のこと。

2. 探究学習と教員データベース

生徒が探究活動を進める上で教員には伴走者としての役割が求められるが、生徒たちが設定する探究テーマは非常に多岐にわたり学外の専門家に協力を要請することも多い。その一方で、生徒にとって教員は最も身近な専門家であり相談を持ち掛けたいと考える生徒も多い。これを円滑に進めるために我々は中高教員合わせて105名分の専門領域や興味の対象などを調査し、ひとつにまとめた「教員データベース」の作成を行った。このデータベースを生徒に配信することで、生徒は学内で自分の掲げるテーマに近い専門性をもつ教員や理解を示して協力してくれそうな教員を探することができる。教員は一社会人として生徒の依頼を状況に応じて受けることとなる。生徒にデータベースの配信を行ってから約1ヶ月が経過したが、既に多くの生徒がデータベースから情報を得て、教員に相談を持ち掛けている。

また、副次的効果として生徒のキャリア教育に対しても一定の影響を与えている。データベースを通じて教員の背景を知ることができ、進路選択をする際にどのようなことを考えて決断したのか?といった相談を持ち掛ける生徒もあり、想定していなかった価値と活用法が生まれつつある。

3. まとめ

立命館守山では中高を通じた探究活動を学校全体で促進し、サポートするべく教員データベースを作成した。本来の目的に対する好影響に加えて、副次的な効果も感じている状況ではあるが、今後直接面識のない教員へ気軽にアポイントメントを取りに行けるような風土の醸成や、文理を問わずに活用しやすくするような指導、より見やすく検索性の高いデータベースへのアップデートなど継続的な改善が必要である。

関西創価高校の世界市民教育 —ユネスコスクールとして—

大月 昇（関西創価高等学校）

創造性豊かな世界市民育成のため、独自のプログラムを展開

関西創価高校は、第1回入学式で創立者池田大作先生が訴えられた「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」との平和の信条を根本に、世界の平和に貢献する「世界市民」の育成を目指し、「環境・開発・人権・平和」の4分野学習を中心に据えた「世界市民教育」を実践しています。

5年間のSGH（スーパーグローバルハイスクール）の経験を踏まえながら、ユネスコスクールとして、SDGsをはじめとする、国連が提起している地球的課題の解決を模索する、独自の探究活動を通して、「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」を備えた、力ある「世界市民」の育成に取り組んでいます。

具体的なプログラムは、①全校生徒対象の探究型総合学習GRIT（Global Research & Inquiry Time）、②希望者を対象とした高度な内容の授業SP（SOKA Progress Class）、③主に1年生の希望者が対象の高大連携プログラムUP（University Partnership）クラス、④2・3年生から選抜した生徒を対象にオール・イングリッシュで発展的な探究活動を行うLC（Learning Cluster）からなります。

1・2年次で地球的課題に関する知見を広げ、表現力を磨きます。3年次では、GRITの集大成として学年模擬国連を開催し、合意形成の力を養成します。過去4回の模擬国連のテーマは、いずれもSDGsにつながるものになっています。

SGH期間は、SGH委員会が中心になって、各プログラムを企画してきましたが、SGH後の今年度からは「世界市民教育推進室」がその役目を担い、推進力となっています。また、GRITの実施内容を検討し、評価する「探究科」も設け、教育の質の向上を図っています。

さらに、ユネスコスクールの全世界に通じるネットワークは、世界市民教育を進める上で大きな糧になると考え、積極的に国内外の教育機関と連携していくことを計画しています。また、SDGsについては、GRITの枠にとどまらず、各教科でもカリキュラムに取り入れていくことを目指します。

新型コロナウイルス感染症の影響で、当初の予定から変更を余儀なくされたものも多くありましたが、今年度の取り組みの主眼となる〈My SDGs in Action!〉がいよいよ始まります。

地球的課題を「我が事」と捉え、その歩みは小さくともSDGs達成に向けた動きを自分から起こしていこうとの思いから、〈My SDGs in Action!〉を企画しました。ユネスコスクールの一員として、取り組む主体においても「誰も置き去りにしない」ことを目指します。



3年生全員による模擬国連を開催

ユネスコスクールにおける地域連携教育とSDGsについて

中嶋 浩晶（和歌山県立橋本高等学校）

I はじめに

本校は、平成 22 年に文部科学省の人権教育開発事業において研究指定校となったのをきっかけとして、平成 24 年度からボランティアの組織的な活動を試みた。それ以前のボランティア活動は、個人やクラブ単位で不定期に実施されていた。そこで、この研究指定を受け高校 2 学年全員が 1 日以上、市内の福祉施設や教育機関等においてボランティア活動を行うこととした。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止により、実施できなかったが、昨年度まで市内の福祉施設や教育機関等の協力で継続実施することができた。

平成 26 年には「ユネスコスクール」の登録を受け、それまで委員会仕立てであった国際教育を分掌内に位置づけ、「ふるさと教育」、「世界遺産教育」として地域についての理解を深めるとともに、清掃活動や語学部によるガイドなどを通して文化財への興味関心を高めることとした。

平成 30 年度には、本校でコミュニティスクール制度を導入したことにより、平成 24 年度以降に実施してきた施策を、ESD の理念に基づき地域と連携した教育としてコミュニティスクールの中に位置づけた。また、平成 31 年度から実施した「総合的な探究の時間」についても地域連携教育やユネスコスクールの中に位置づけていくこととした。

II 実践内容

(1) 本校のボランティア活動について

- ・ 高校 2 学年のボランティア体験
- ・ 通年のボランティア活動とボランティアセンター、ボランティア BANK 設立
- ・ 地域の小中学校の連携と学習支援活動
- ・ 生徒会と各クラブのボランティア活動 など

(2) 国際交流について

- ・ 留学生の受け入れ、派遣と姉妹校（山東省済南中学）との交流

(3) 世界遺産教育について

- ・ ふるさと学習（世界遺産教育）
- ・ 語学部の高野山ガイド

(4) 「総合的な探究の時間」について

- ・ 1 学年の橋本市との連携
- ・ 2 年次の和歌山大学との連携による SDGs



[高校 2 学年ボランティア体験]



[子ども食堂ボランティア]

ESD for 2030にもとづいたESD・SDGsワークショップと コーチング

ー ネットを使った社会人向け実践報告 ー

長岡 素彦（一般社団法人 地域連携プラットフォーム 共同代表理事）

2030持続可能な開発アジェンダ(SDGs)はその全体のアジェンダのタイトル”Transforming our world”(私たちは世界を変革する)にあるようにサステナブルトランスフォーメーションであり、共生(1)による持続可能な開発による地域・世界づくりである。(2)

第74回国連総会決議「持続可能な開発のための教育：SDGs達成に向けて(ESD for 2030)」(以下、「ESD for 2030」とする)ではトランスフォーミング(変革する行動)する学習者の重要性も述べられた。

このトランスフォーミング(変革する行動)する学習者はSDGsチェンジエージェントである。SDGsチェンジエージェントは、環境、経済、社会の新たなトランスフォーメーションをすすめる「システム」のチェンジエージェント(変革の担い手)(3)であり、同時に、ひとりひとりが学びによって自身の行動、態度、ライフスタイルからトランスフォーメーションをすすめる「個人」としてのチェンジエージェント(変革の担い手)(4)の両方である。このことにより、システム・社会と個人のそれぞれのSDGsトランスフォーメーションをすすめることができる。そして、ESD for 2030の4.3において、このトランスフォーミング(変革する行動)としての学習プロセスが明示されている。

今まで、DESD期間中はESDワークショップを多数企画実施し、SDGs策定後はSDGsワークショップを行っている。(5)、また、これらのワークショップを考案、実施し、ワークショップを学的に分析し、改良(6)している。

今年度は、ESD for 2030のトランスフォーミング(変革する行動)としての学習プロセスにもとづいたESD・SDGsワークショップとコーチングを多数展開した。

註

(1)長岡素彦,2018,SDGs・持続可能な共生をすすめる ESD・地域連携教育,共生科学第9巻

(2)長岡素彦,2020,SDGsロードマップ -2030アジェンダ・SDGs よるトランスフォーム,武蔵野大学環境研究所紀要 9

(3)長岡素彦,2019,SDGsとSociety5.0の時代のESDと新たなシチズンシップーESDとしてのSDGsー,日本ESD学会大会

(4)長岡素彦,2020,ESD for 2030持続可能な開発アジェンダとMIL、デジタルシチズンシップー科学技術イノベーション型の教育からESD for 2030への転換,メディア情報リテラシー研究,第2巻第1号,法政大学

(5)長岡素彦,2018,ESDとしてのSDGsワークショップー目的別のワークショップ「持続可能な未来」,日本ESD学会大会

(6)長岡素彦他,2019,2030アジェンダ・SDGsを理解し,自分事化するためのワークショップの実践ー6つの事例と自分事化のフェーズ,武蔵野大学環境研究所紀要 8

使命感と達成感を大切にした国語科×総合の単元開発

中谷 栄作（橋本市立あやの台小学校）

I なんて勉強せなあかんの

いつの時代も子どもたちからのこの「ぜいたくな問いかけ」はなくなりません。教員11年目にしても、未だに感じます。この問いかけに答えることなくして、私たち教員は教鞭をとることはできないのではないのでしょうか。

II なんてそこまでやらなあかんの

私はESDの推進に努めています。総合的な学習の時間を軸にしたカリキュラムマネジメントを行うことで、子どもたちが1つのテーマの元に収斂された学びを享受しつつ、多様な価値観を創出、醸成していけるような学校教育の実現を目指しています。その効果については評価と納得をいただく一方で、そこまで手間をかけることによって働き方改革とは逆行した流れを生み出しているのではないかという指摘もあります。

III PBLの実践から

そこで、PBLの実践を参考に、子どもたちが本気になれるようなミッションをつくり、それに向かう中で教科教育の目標を達成していく単元作りを行いました。例えば「ミツバチの絵を描いて植樹活動に貢献しよう」であれば、ミツバチを探して自然の豊かなミツバチの好む場所について知ったり、その特性や環境への寄与について調べたりしたうえで、絵に描いて応募をしました。みんなに伝える、賞をとる、という目的達成のためにがんばる内に、図工科の目的も達成していく、ということです。これであれば大きな負担増なしに子どもたちの学びを活性化させることができます。

IV 使命感と達成感をシェアすることが重要

ただPBLの考え方を取り入れるだけでは、育つ資質能力について共通点はあれど、子どもたちに示す学びの方向性としてはばらけてしまいます。今回は5年生で環境をテーマに1年間実践を行っているので、国語科「」の単元において、環境をテーマにミッションを立て、子どもたちに課題を与えました。全6時間の単元で、最後に審査を関係教員によって行ってもらい、グランプリまで決めています。全員審査を通過できれば、自分たちが手に入れたいある資格に認定してもらえるのだから、真剣に頑張らねばならない。そんな使命感を共有した仲間となれば、教え合いも活発になります。そこで得た達成感が共有できれば、次の活動に向けての意欲にもつながります。そして1年間同じジャンルのテーマについて学ぶことを繰り返していくうちに、勉強する理由は自己実現のためであることが見えてくるのです。教科によって分断されないカリキュラムデザインについて今回提案させていただきます。

概念変化に伴う価値観の変容

河野 晋也（大分大学教育学研究科）

I はじめに

Education2030プロジェクトにおけるポジション・ペーパーにおいて、「コンピテンシーの概念は、単なる知識及びスキルの獲得以上のものであり、複雑な要求に応えるために知識やスキル、態度及び価値を動員することを含む」ものとされ、それらの相互関係について言及されている。協調的学習によって構築された知識は、スキルを働かせることによって活用され、また態度や価値観によって媒介されるものである。つまり価値観の変容には知識の構築が伴い、また価値観が知識の構築を促進するということである。

II 参加メタファの学び

参加とはレイヴとウェンガー(1993)の正統的周辺参加を代表とする状況的学習論の視点に立った学習理論における学習者の役割のことであり、「役割を担うこと」「一部を担うこと」と同義である。参加メタファの学習に取り組むことで、学習者は、既存の知識を活用しつつ新たな知識の構築へ加担していくことになる。知識の構築については、上述のポジション・ペーパーにおいても、「他者との協力と共同により既存の知識から新しい知識を生み出すことを通して」価値の創造がなされると述べられており、知識の構築による価値観の変容は今後のESDにおいて重要なテーマとなりうる。

実際に、レイヴとウェンガーは、実践共同体の取り組みに参加することで、十全的参加、すなわち「共同体において中心的役割を担い、『一人前』としてのアイデンティティの感覚を得ること」に至ると述べる。実践に参加するということは、その共同体において重視されていること、優れているとされていること、善いとされていることを学んでいく価値観に関わる学びである。つまり実践共同体に属して行われる知識の構築は、その共同体が重視する価値観に左右されると言うことができる。その共同体内で、それまでにはできなかった知識を構築することができるということは、学習者の価値観が変容したと見なすことができる。

III 知識の構築が起こる仕組み

このように捉えれば、価値観の変容は知識の構築がなされるたび、実践のたびに新たな価値観を獲得することになってしまう。しかし実社会において、価値観の変容はそれほど頻繁に起きるものではない。このことを、断片的知識論を援用することで論じる。断片的知識論においては、知識の断片は無数に存在するが、実際に何かの課題や必要に際して、どんな断片的知識を呼び出すか、そして呼び出した知識を活用するかどうかは、それぞれの学習者の経験に基づく優先度に支配されているとされる。そのため知識の構築は容易に起きるものではない。この結びつき方は、価値観に大いに干渉されると考えられる。このように考えれば、ESDにおける価値観の変容は、どのように知識を構築しなおすかという再構成の過程で可能になると言うことができる。

近畿ESDコンソーシアム運営委員会

加藤久雄	高橋豪仁	中澤静男	大西浩明	太田 満
河本大地	阪本さゆり	杉山拓次	小尾二郎	吉田 寛
鎌田大雅	谷垣 徹	狗飼菜々子		

日本ESD学会第4回近畿地方研究会実行委員会

大西浩明	河本大地	中澤静男	太田 満	河野晋也
新宮 济	三木恵介	圓山裕史	阿彌茉央	島 俊彦
藏前拓也	高良宗彦	石田通大	西口美佐子	吉田 寛
谷垣 徹	山方貴順	樋口大介	春日 光	中澤哲也
後藤田洋介	杉山拓次	町田幸恵	檜原正巳	

(順不同)

ユネスコスクール オンライン近畿地方研究大会

日本ESD学会第4回近畿地方研究会

実践発表・研究発表要旨集

発行日 2020年11月1日
発行 近畿ESDコンソーシアム
日本ESD学会第4回近畿地方研究会実行委員会
〒630-8528 奈良市高畑町
奈良教育大学 次世代教員養成センター 中澤研究室